

# STYLING

## MONO

ADO15と名付けられたミニがBMC  
(ブリティッシュ・モーターカンパニー)  
からデビューした当時、まだ「ミニ」という  
名は存在していなかった。1952年に  
オースチンとモーリスが合併してできたBMCの  
「オースチン・セブン」、「モーリス・ミニ・マイナー」  
という2モデルがデビューとなっている。



## VOL.66 mini SINCE 1959~

●[ミニ]

Photo / BMW JAPAN

Text / Teruhiko Doi (WPP)



英国の道路にはすべて番号がある。  
地図と標識を見逃さなければ  
まず道に迷うこともない。  
幹線の大きな道路は1桁だが、  
これが4桁になると  
都市部ではほとんど  
路地のような道になり、  
郊外では片側1車線の  
狭い道路になる。  
ビートルズの  
「The long and winding road」は、  
ポール・マッカートニー自身の  
人生における閉塞感を  
歌ったものだと言われているが、  
その長くて曲がりくねった  
道のイメージは、まさに  
英国の田舎道でよく見かける  
4桁の道路そのものである。  
そして牧草地帯のグリーンと、  
石積みの柵の間を通る、  
あまり広くない道路を  
疾走するのには、  
赤やブリティッシュグリーンの  
『ミニ』ほど似合う車もない。  
何百年も前からそこに佇む  
古城や城壁のグレー、  
黒に白の縁取りが印象的な  
チューダー様式の建築といった、  
色彩的に地味な  
英国の景色の中で、  
ミニのコンパクトで  
完成度の高いデザインは、  
まさに求められる要素として  
生まれたものだと思う。

# STYLING

## MONO

「オースチン・セブン」と「モリス・ミニ・マイナー」の違いはほとんどなく、わずかにフロントグリルとエンブレムの違いで区別できるくらい。つまり、実質的には同じ車だったがそれぞれのブランドイメージで販売された、という歴史がある。



全モデルに新開発のターボエンジン採用。MINIツインパワー・ターボ・テクノロジーは可変制御システム、ダイレクト・インジェクション、ターボチャージャーを組み合わせたもので、出力は40%向上、燃費は15%低減を実現(MINI Cooperにおける先代モデルとの比較)。



丸形ヘッドライト、六角形グリル、クロームのパーツというミニのデザインアイコンは残されているが、アレンジは現代風。縦方向に拡大したフロントグリルは初代へのオマージュ。



この4月に7年ぶりのフルモデルチェンジで登場した新型ミニ。ミニの基幹モデルにはコンバーチブル、クラブマン、クロスオーバー、クーペ、ロードスター、ペースマン、そしてハッチバックという7モデルがあるが、今回はハッチバックモデルが

モデルチェンジ。外観や内装、そしてパワートレインを一新し、最先端の技術が搭載された、間違いなく次世代のミニをリードする充実ぶりである。もちろん、伝統的なデザインアイコンはきちんと継承。伝統と革新のバランスがセンス良くまとまった、美しいコンパクトだ。



大型化されたリアコンビネーションライトの採用などで、リアデザインはかなり個性的な表情を持つようになった。ボディと一体化したバンパー、ロゴなど、スマートな仕上がりだ。

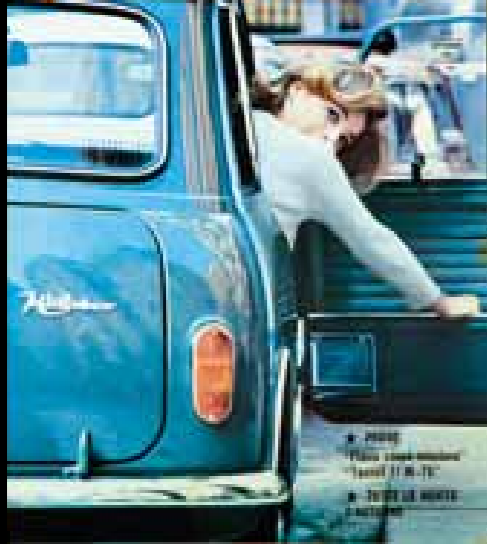


## MONO



写真はF1やインディ500といった最高峰のレースで名を馳せていたジョン・クーバー。彼によって改良されたのが「ミニクーバー」。現在、その名はBMWによってライセンスされミニの上位モデルにその名が付けられることになっている。

## QUATTRORUOTE



1959年のオースチン・セブン／モーリス・ミニ・マイナー。横置きされたFFエンジンと、後部トランクの荷物スペースが実に魅力的。このサイズで大人4人が乗れるというのは、確かに驚きだったはずだ。

発売から55年目を迎えてもロングセラーを続けているミニには、さまざまなエピソードがあり、数多くのバリエー

ションを生み出してきた。しかし、近代の自動車デザインが洗礼を受けた過剰な流線型に走ることなく、箱形のスタイルを保持し続け、個性的なギョロ目のフェイス・デザインは変わらず個性として守り続けている。現代の消費社会において、伝統を破壊しデザインを変えて革新に走ることよりも難しいことではない。現在はBMW傘下にあるが、その長い歴史の中でMINIがMINIであり続けられたのは、多くのデザイナーたちがその存在価値に対して愛を持ち続けていたからなのではないだろうか。

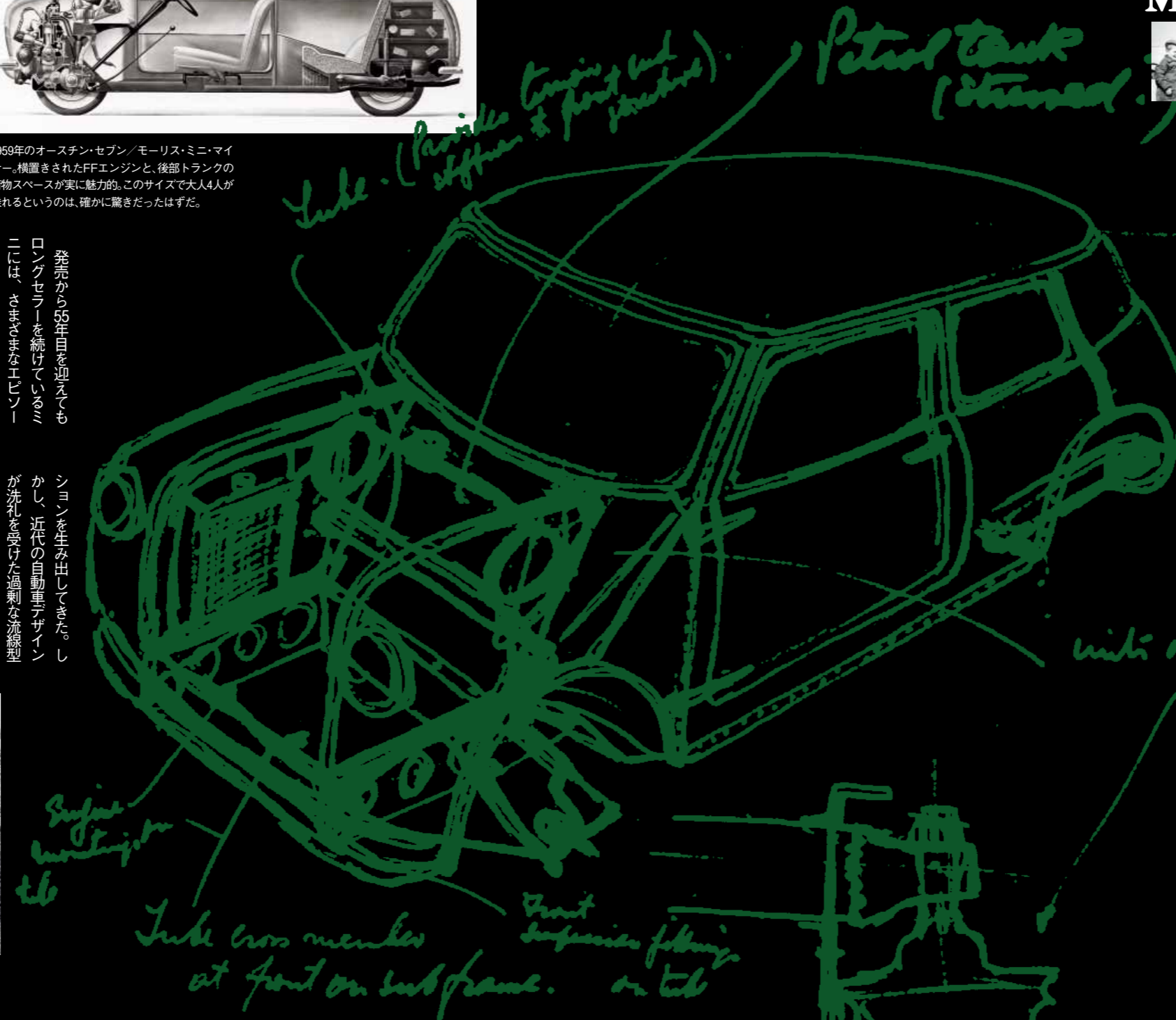


写真手前からMINI CLUBMAN、MINI 1275GT、CLUBMAN ESTATE



↑MINI ROCKETMANと名付けられたコンセプトカー。  
←現在のMINIデザインチーム。

**デザインの未来**  
ミニの系譜はデビューから1967年までの「マークI」、1967年10月から1969年10月までの「マークII」、1984年までの「マークIII」、1984年からはホイール径が12インチ（従来は10インチ）に拡大された「モタン・ミニ」、1991年からはエンジンが全車インジェクション化された時代、そして2002年からいまに続くBMW時代。革新の遺伝子は変わらず、MINI Visionと呼ばれるクリエイティブなデザインコンセプトが次々と打ち出されている。



## サイズが世界を変えた！ 名車ミニのストーリー

江戸時代の職人が武家や町方の旦那衆によって育てられたように、英国では貴族社会がデザインや工芸、芸術などを育ててきた。それは同国の自動車メーカーにとっても同様で、とにかく優雅で気品のあるデザインが英国車の特徴ともなっている。1959年、アレック・イシゴニスによって設計されたオースチン・セブン／モーリス・ミニ・マイナーも、大衆車としてのデビューではあったが、装飾ばかりではなくサイズの無駄ささえも省いた、実に完成度の高いデザインの手本だった。

この歴史に残るコンパクトカーが誕生する背景には、まず1952年のオースチン社とモーリスを擁するナッフェイルド・オーガナイゼーション・グループという2大自動車メーカーの合併がある。それで誕生した「BMC（ブリティッシュ・モーターカンパニー）」は英国最大の自動車メーカーとなった。このメーカーで1955年から設計・デザインの中心的な役割を担っていたのがアレック・イシゴニス。

ところが1956年にスエズ動乱が勃発。その影響で国内ではガソリンが不足し、急遽、燃費のいい小型車、それも大人4人が乗れる限界のサイズまで縮小したモデルの開発

イシゴニスはこうした。イシゴニスはこの難解な命題を、横置きエンジンのFF車という、当時としては画期的な発想で解決したのである。開発コードADO15という名で作られたこの小さな自動車は、オースチン・セブンとモーリス・ミニマイナーとして、2つのブランドから発売された。

価格的にもサイズのにも大衆車としてのデビューだったが、面白いことにそのポテンシャルに飛びついたのは貴族階級の人々だったそう。いまだこそ小型で経済的というのは、普遍的価値観となっているが、1950～1960年代においてははかばか先進的な発想だった。モーターセクションによって増え続ける車の数と交通渋滞、国内の狭い道路事情、ガソリン不足といった社会的な問題意識で自動車を選ぶという消費意識の高さは、インテリジェンスな人々だったからこそ可能だったのかもしれない。

# STYLING

**MONO**

ミニに関するお問い合わせは  
@MINI カスタマー・インタラクション・センター  
☎0120-3298-14  
<http://www.mini.jp/>



## ●MINI現行モデル・ラインナップ



Coupe(クーペ)



Clubman(クラブマン)



Crossover valentine road(クロスオーバー・バレンタインロード)



Crossover(クロスオーバー)



Convertible(コンバーチブル)



John Cooper Works(ジョン・クーバー・ワークス)